
十月十日 I N 異世界

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月十日イン異世界

【Zコード】

Z9624Y

【作者名】

桝

【あらすじ】

このお話は、異世界に迷い込んだ少女が、歳の差・体格差のある旦那様へ嫁ぎ、全ての人に勘違いされながらも楽しくマイライフを生きるという、作者のとある日に浮かんだ妄想・空想を元に執筆されております。

「こわい、こわいの……」

怯えたように後ずさるあたしを見て、痛ましげにその瞳を伏せる男とメイド多数。

「……リリィ、すまない。にをはこびだせつ」

小さく謝罪を口にした男は、それでもこれ以上の逃亡生活を許す気はないらしい。

一言命じられて、壁際に控え顔を伏せていたメイドや使用人たちは、火急的速やかにあたしの小さな隠れ家から少ない荷物をさらに小さくして広げられた大きな布に包み運び出す。

「……こ、わい」

そう呟きながら、ああ……これであたしの心穏やかだった日々も終わりか、と諦めの籠つた何ともやるせない気持ちのまま思い返せば、本当にあたしの人生は波乱万丈だな。

始まりは三年前、何が原因かなんてことはいまだに解明に到つていなければ……あたしは異世界へと迷い込んだ。気が付けば見知らぬ路地裏にいて、言葉も通じず、何より生き物のサイズが大違いも良い所だった。人……なのだ。それは間違いないと思う。でも、これは無いだろう?と顔も知らぬ神に問い合わせたくなるほど、彼らは大きかった。どんなに背伸びをしても、あたしの身長はこの世界の平均の人間の腰くらいしかない。話しかけようにも彼

らの言葉はあるで、そつ……例えるならノイズの様にぎりぎりと耳障りな音でしかなく。

何度泣いただろつ、何度声を嗄らしたか覚えてもいない。……十五の秋、あたしは世界を超えた。

それから半年もの間路地裏を彷徨い、結果生きるためにゴミも漁つたし、お風呂なんて夢の中でしか堪能できない日々を送り、立派なホームレス……と言えば聞こえは可愛いけれど、そつ、小汚い浮浪者へと成り果てたのである。

そして今から一年と半年前、あの日、あたしはその小ささゆえか幼い顔立ちが田に留まつたのかは分からぬけれど、半年もの間小汚い孤児としか見られていなかつたはずが奴隸商人へと捕まり、田隠しと手かせをされて乱暴にどこかへ連れ去られた挙句、数週間もの間、陽の入らないじめじめした場所へと閉じ込められた。

ぴちゃん……と、どこかから響く水の滴る音。地面に転がされ田隠し状態のまま、どれほどの時間が経過したのか。容赦なく縛られたままの手足は血が通つていないので、感覚もない。本当に、死にたいと思つた。ここへ迷い込んで、何度も帰りたいと泣いたけれど、所詮異世界なのだ。あたしがどれほど泣こうが、気にする者は一人もいない。心配してくれる母も父も兄も弟もペットの犬も……親友も。あたしの嘆きも悲しみも、届きはしない。……だから、もういつも死んでしまえば、そつ、考えてしまつほどには、心も体も、疲れていたのだ。

けれどあの時、田隠しの布の端に光が差し込んだのだ。ゆらゆらと揺れる蠟燭の光。奴隸商が来たのかと身体を強張らせたあたしの耳元で、突然、あのノイズのような聞き取れない音が響き、お恥ず

かしながらも人生で初、極度の疲労とてつもない恐怖により氣を失った。

そして目を見まさせば、これまた見知らぬ男の家で、それもふかふかの柔らか高級ベットへ寝かされていて。ふえ？って飛び起きましたよ、そりやね。でもまあ、悪いようにはされず保護されたらしいことを、言葉は通じなくとも感じ取つたあたしは大人しく療養した。だって、言葉が通じない以上いつなんどき放り出されるか分かつたもんじやないでしょ？だから出された食事はそれこそお腹が裂けるんじやないかつてくらいパンパンになるまで食べて、お風呂だつて日本にいた頃はいつでも入れたからそこまで真剣に入浴した事もなかつたけど、肌が紅くなるくらいじしごし擦つて温かなお湯にものぼせるほどじつくりと浸かつて今の幸せを堪能していた。

そして、何よりもこの穏やかな生活の中で一番助かつたのは言語教育！！一年半経つてもまだ子供の様にひらがな言葉しか喋れないけど、それでも簡単な単語なら理解できる。初めて理解できたとき、感動して泣いてしまつたほど。他人と意思疎通が出来ると言うのは、本当に人間には必要不可欠で、心身共に安心感を与えるものだなあなんて実感できた出来事だった。

——そして、やつと幸せになれたはずのあたしが、今現在何故怯えているのか……。

それは、いくら簡単な言葉がわかるようになつたと言つてもそれは所詮ひらがな単語。難しい単語や言葉、会話など高レベルなど無理だつてのに……勝手に勘違いしたこちらの世界での保護者によつて、大恥をかかされ、それによつて湧き出したとてつもない羞恥と怒りが噴火して、あたしが家出。まあ、結局は隠れ家も見つかってしまい今連れ戻されているわけだけど、でも元々悪いのはある人なんだから……。ああもうっ！思い出すだけでも恥ずかしす

“せめて泣きたくなぬハハーの…！”

* * * * * ドーラ・キルシュ・ノールブルク

「……すまない、リリイ。荷を運び出せっ」

怯え、後ずさる黒髪の女性……。一見した者にはその幼い容姿から彼女が実は成人していて、しかも既婚者だとは信じられまい。そう……世界でも貴重な、黒を身に宿す彼女は、

「ノールブルグ副団長、失礼なことをお聞きしますが……」

その時、儂の部下で医療術者のナーズが聞きずらそうに瞳を伏せて問いかけてきた。

「構わん、続ける」

「……奥方はなぜ、夫である副団長を見てなお、あのよつに怯えられていらっしゃるので御座いましょう?」

……そんなことは、儂が聞きたい。リリイは、一年半前に奴隸商の穴倉を一斉包囲し摘発した際に初めて出会った。彼女は奴隸商に捕まり、長い間牢に転がされていたらしく衰弱も激しかったようで、初め王国医術院で保護されるばずが、なぜか彼女を助け抱き上げたままだつた儂の服を握りしめて離さなかつたため……儂の屋敷へと運び込まれた。そして定期的に王国お墨付きの医療術者が屋敷へと彼女の様子を診に足を運んでいたのだが、その容姿から以前の大戦で被害にあい絶滅したと噂されていた国境に集落を置く少数民族：

…黒の一族の生き残りだろうと断定され、以来王国保護指定され、国より多大な援助を受けている。

心身の疲労により深い眠りについていた彼女が目を覚ましたその時、儂等は一族の絶滅から数年の時をどう生きていたのか、少しづつでも何かを聞ければと思っていた。しかし、目が覚めた彼女は言葉を無くし、ただ身体を生かすと言つ意味でだけ食事をし、風呂へ入り、深く眠った。

儂は、王宮騎士団副団長と言つ重責故日々忙しく、彼女に目を向ける時間を取りうともせずに半年が過ぎた。そして半年経ち仕事もやつと落ち着いてきた冬頃の事だつたか。彼女の世話を任せていたはずのメイドたちから、彼女は保護されてから一度も笑顔を見せないのだと相談を受け。その相談をふむふむ、と大人しく聞いていた儂は最終的に何がいけなかつたのか……旦那様は一度も見舞いにすら訪れずお可哀想だとはお思いになられぬのですか？！これではまだ年若い彼女があまりにも不憫すぎます！－と抗議まがいの説教まで受けてしまった。

……そうだ、それで儂は彼女の部屋まで出向き、何の反応も示さない彼女の能面のような表情を前に語りかけ続けた。時には幼児用の絵本を読み聞かせ、時には儂の若い頃の失敗談を、そして、いかにメイドたちが彼女を心配しているのか。そうして「一月が過ぎ、半年が過ぎ、一年が過ぎた頃……話す事が出来なかつた彼女が少しずつ変わつていつた。可愛らしく微笑むようになり、一人、馬で遠乗りにも出かけるまでに回復し、自然彼女との距離は縮まり、儂はこの年になつて初めて宝石店で女性物の小さな指輪を買った。そして、結果……年甲斐もなく婚姻まで至つたと言つわけだ。

まあ、リリイは儂の腰ほどしか身長もなく、夫婦として見られる

「ともなかなか難しいが、今となつては怒氣の良い話のネタだ。

「リリイ、いつたい何があつたと言つのだ。びつして勝手に屋敷を出て行つた？」

震え、壁際のベットの端まで後退り顔を伏せた彼女の傍へ膝をつき、優しく声をかける。

「い、わい……いや」

未だ片言の単語しか口にすることが出来ない彼女は、小さな赤い唇を震わせて、小鳥のようにか細い声で何かに怯えているのだと儂へ告げた。

「怖い、か。ふむ……リリイ、わしはだれだ？」

彼女が屋敷を飛び出す前は、言葉遊びの様に良く口にしたものだ。

「わ、しは、だれ？わ、しは、りりいのすきなひと」

たゞたゞしく、あの頃の様に言葉をなぞり聞いを返す彼女に、安心するよう大げさに微笑み

「そうだー儂はリリイの好いた男だ。儂ほど強い男はどこを探そうともやつはおらんぞ？何を不安がるのだ？」

「す、きな……ひと」

リリイは儂の張られた声にびくつ、と顔を上げ、そして甘い声で儂を見つめそう言葉を零した。

「帰ろつ、儂等の家へ」

「い、え……につ？」

彼女が答えを出す前に、ころりころりと言葉を舌の上で転がしている様子を見て、儂は彼女を大きなシーツに包み抱き上げた。

「ナーズ、すまないが後は頼む」

「……今日付き合わされた全員を後日酒場へ連れて行くとお約束頂けるのなら」

「……ふんっ」

しつかりしとるわい。まあ、行方不明になつた少数民族の生き残り、しかも王宮騎士団副団長の奥方の肩書を持つリリイを捜索すると言う大義名分を掲げていても最終的には夫婦喧嘩に巻き込まれたような形になつてしまつたしな。部下に奢るのも上官の務めだ、致し方ないとするか。

「リリイ、いつたい何があつたと語つのだ。どうして勝手に屋敷を出て行つた？」

あたしが怒りに震え、それ以上近づくなオーラを放つても……この人に通用しないのはもう一年以上一緒に暮らしてようく理解してはいるけどもっ――

「い、わい……いや」

まあ、怒つてゐるあたしを宥める為にベットの端に膝をついたまでは良い手だと思うわ。そんな風に優しくされて悪い気分になる女性はなかなかないでしようし。でもこの人は、あたしが難しい話し言葉を苦手としていることを知つてははずなのに……なぜ早口で語りかけるの？名前を呼ばれたのは聞き取れたけど、そのあとなんて言つてたのか全然理解できないつつーの――

……一応、今会話成立してませんよ?と氣づいて貰う為に「早口で怖いんですけど!」とこちらの言葉に置き換えて口にしてみたものの。

「怖い、か。ふむ……リリイ、わしはだれだ?」

ああ、そうですよね?……全然通じてられないらしい。あげく、お屋敷で言葉の勉強の為に良くこの人に出されていた問題をこの場にて披露されてしまった……騎士さんやメイドさんの沢山いる狭い部屋の中で。十八にもなつてこんな幼稚な言葉遊びしていたのが、公の場で暴露されてしまった!!

なんて恥ずかしい……しかし、この問題に答えない」とで更なる羞恥にさらされるのはもう勘弁なので

「わ、しは、だれ？ わ、しは、りりいのすきなひと」

……ええ、分かつてありますとも！ 公衆の面前で告白して、お前は十八にもなつて恥ずかしくないのかつて？ ! うう、恥ずかしいですともつ！ ! けどそれもこれも、これ以上の恥をかかないため！ ! 一時の恥はかき捨てます！ !

「そ、うだー、儂はリリイの好いた男だ。儂ほど強い男はどこを探そうともわづはおらんぞ？ 何を不安がるのだ？」

もうやめてつ！ ! そう叫べたらどんなに救われるだらつ……。奥手代表である生糀の日本人としては、この世界の大っぴらな愛とスキンシップに耐えつる心も体も持ち合わせちゃいないんどう！ !

「す、きな……ひと」

嫌いじゃないですよ？ 本当はとても「すきなひと」だけれど……今現在あなたのもつとも大事な人は？ とか問われれば……今となつては瞳を閉じても瞼の裏に浮かび上がる最愛の夫、だけど……でもやつぱり恥ずかしいものは恥ずかしいんです！ !

「帰ろ、儂等の家へ」

ええつ、もう「いえに」帰るんですか？ でもまだ貴方にかかされた大恥について、どうやって仕返しするか考えていませんけどつ？ !

「い、え……につ？」

なんて、言葉が分からぬ分心の中でもたくさん返事を返している間に……気が付けばさわり心地の良い真っ白シーツに包まれて、愛する夫の分厚い胸板と太い腕に抱き上げられ、帰途に着いておりましたとさ。

そして数週間ぶりに帰つた我が家では、あたし付きのメイドや執事さん、料理人の皆さんに散々叱られて甘やかされるのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9624y/>

十月十日IN異世界

2011年11月29日17時49分発行